

校長のつぶやき

沼田市立沼田中学校 「校長室より」

平成25年4月17日(水) 第1号

校長の「つぶやき」を不定期でお聞きください。

本校3年目を迎えた校長の「つぶやき」を不定期にお届けします。これまでに自分自身で経験したことや本で教えてもらったことなどの感動のお裾分けを、ほんの少しだけですがしていこうと思います。適当に無視したり、読み流したりしていただければ幸いです。

第1号は、学ぶ「原動力」となる子どもの旺盛な「好奇心」や「意欲」についての話です。

子どもは学びたがっている

末娘がまだ3歳前の頃のことだと思います。二人だけで時代劇『銭形平次』を見ていたときのことです。時刻は20時40分を過ぎた頃、テレビの中では、北大路欣也扮する銭形親分が、殺しが行われたと思われる座敷の畳を小柄で引き上げていました。いよいよクライマックス。と、そのとき娘が「ネズミがでたん？」と突然聞いてきました。「そうじゃないよ。ここで人が殺されたんだよ」と伝える私に、再び「ネズミがでたんでしょ」と聞く娘。丁度いいところなのに何を考えているのかと、テレビから娘の顔に視線を移すと、真剣そのものの顔。「ネズミなんかでないんだよ」と念を押す私の声も上の空でいる娘を見て、ふと思い出したことがありました。

それよりも一か月前くらいのこと。同僚のアメリカ人から「ネズミが出るので、駆除してほしい」と依頼され、父と三人の子どもを連れて彼女のアパートを訪れたことがあったのです。そのとき、確かに私と父は、天井裏をのぞいた後に、畳を上げて床下を見たのでした。まるでお客に来たような気分ではしゃいで、姉や兄と部屋の中を飛び回っていた末娘でしたが、初めて見る「畳を上げる」という動作＝「ネズミ捕り」というようにインプットしたのでしょうか。そして一か月後、「ちょんまげ」を結った変なおじさんが畳を上げるのを見て、「このおじさんもネズミを取ろうとしているんだ」と思ったのです。

「ネズミではなくて、ここで誰かが死んじゃったんだよ。だから、このおじちゃん、ああやって畳を上げて調べてるんだよ」と丁寧に説明したものの、もし、一か月前のことを思い出さずにテレビの中の銭形親分に集中するあまりに娘の言うことに耳を貸さなかったら、学ぶ意欲の芽を摘んでしまったのではないかと、ゾッとする思いがしたことを今でもよく覚えています。

とともに、今でもテレビで北大路欣也を見ると、ふとあのときのことを思い出し、子どもが生まれながらにして持っている「既習の知識と目の前の新たな事象とを結びつけて考えよとする力」や「周囲から学ぼうとする意欲」を、何気ない言葉や動作で阻害したり、壊したりしていかないかと不安になることがあります。

その「学ぶ意欲」の格差が広がっていると、県立女子大学長の富岡賢治氏(現高崎市長)が警鐘を鳴らしていたのは、今から6年前のことでした。「OECDの国際比較調査で、日本の子どもたちは世界でも際立って学習意欲に欠けていることが明らかになった」とし、意欲の向上のために、①子どもたちをほめて育てること、②分かる授業にするために基礎・基本に絞り、ゆっくり丁寧に教えること、の二つを提唱していました。(読売新聞『随想ぐんま』平成19年6月22日)

この提言は、教える立場にある者にとっては不易な課題ではないかと思っています。

7年間にわたる指導主事としての経験の中で、多くの授業を観させていただきましたが、たった一度だけ、授業中に子どもから質問を受けたことがありました。昨年度の学校集会でも生徒に話した内容ですが、改めて紹介します。

子どもは学びたがっている PART 2

『おじさん、“エダマメ”って“やさい”だっけ？』

これは、授業を参観していたときに、小学校2年生の児童から受けた質問です。「おいしいやさいをつくらう」という生活科の授業の中で、子どもたちがどんな野菜を栽培したいかを話し合っているときに、突然私に振られた言葉でした。確かに、黒板には「きゅうり」や「トマト」と並んで「えだまめ」という言葉がありました。授業中に質問されるとは夢にも思わなかったことや、豆類が野菜の仲間なのかどうか考えてもみなかったことから、「いい質問だね。先生に聞いてごらん」と授業者に振るのが精一杯でした。「なんだ、おじさんも知らないのか」とがっかりしたその子の表情が今でも忘れられません。

帰宅早々、「野菜」という言葉を調べてみると、広辞苑には「食べる部位により、葉菜あるいは葉茎菜・果菜・根菜・花菜に大別。芋類・豆類はふつう含めない」とありましたが、「果菜は果実を食べるもので、トマト、きゅうり、えん豆などである。なお果菜に入れてもよいが甘味の多いもの、例えば、まくわうりなどは慣習上別にして果物と呼ぶこともある。また、とうもろこしなどは穀物であるが、若いものを穂のまま食べるようなものは果菜として扱うので、この分類には学問的な厳密な定義はない」(ブリタニカ国際百科事典)という記述もあり、分類の仕方によってどの仲間に入るのかに違いがあることが分かりました。なお、「トマト」については、1893年に野菜にするか果物にするかについて、アメリカの最高裁で争われ、「デザートには出されない」という理由から「野菜」と決定したということも知り、日々の生活の中でよく分かっていないまま使っている言葉がたくさんあることに冷や汗の出る思いがしました。

予期せぬ質問に動揺した理由がもう一つありました。私に質問を投げかけたその子は、授業の始まりから落ち着きがなく、体育の授業を気にして窓の外に目をやったり、教室のあちこちを見回したりしていたため、「注意散漫な要注意児童？」とノートにメモし、授業後の担任との面談で話題に出そうと思っていた子だったのです。周りをキョロキョロしながらも、「うちの父ちゃんや母ちゃんは、“えだまめ”のことを“やさい”だなんて絶対言わねえよなあ」とずっと考えていたのかもしれませんが。また、授業が進むにつれ、どうにも納得できなくなり、教室の後ろに偉そうに座っている「おじさん」に疑問をぶつけてみようと思ったのかもしれませんが。子どもだからといって決して侮ってはいけないということや、現象面だけをとらえて軽率に判断してはいけないという教訓もこの子が教えてくれたように思います。

以来、「えだまめ」という言葉を耳にするたびに、「おじさん、よく理解していないのに、分かったような気になっていることはないかい」「上辺だけで人や物事を判断しているんじゃないかい」と、あの子に質問されているような気がしてドキッとしてしまいます。

英語の「フリガナ」

ある先生から聞いた話です。

英語の授業で、教科書をしっかり読めるようにするために、「リーディング週間」を設け、1ページを1回読んだら1点獲得できるようにし、「一週間で何点取れるか挑戦してみよう」という宿題を出したときのことだった。

その日の放課後、そろそろ部活動の指導をしなければと、机の上の整理を急いでいると、職員室の廊下から中の様子を不安そうにうかがっている、小柄な二人の男子が目に入った。職員室には私と先生の二人だけだったが、二人とも英語の教科書を手に入っていたので、

「何か用事があるなら、遠慮しないで入って来いよ」と言葉をかけた。それで決心がついたのか、二人は互いに先を譲り合いながら、おそろおそろ私の側までやって来た。

「何か用かい？」と尋ねると、一人の生徒が言う。

「先生、今日、宿題出したっぺ。」

「うん、出したよ」

「俺たち、よく読めねえからさ、フリガナふってくれ。」

日頃の学習が遅れがちの二人が、宿題のことを忘れずに職員室まで来てくれたことに感激し、

「よく来たなあ。偉いぞ。すぐやってやるからな」と、二人の手に入っていた英語の教科書を机の上におき、同じようにフリガナをふった。書き終えた教科書を二人に戻したが、今日は部活動の指導は遅れてもいいだろうと、腹を決めて二人に言った。

「間違っていると大変だから、ここで読んで見ろよ」でも、二人は、困ったように顔を見合わせるだけで、いっこうに読もうとしない。

「先生もいるけれど、一緒に聞いてもらおうよ。早く読んで見ろよ。どっちからでもいいからさ」

ますます困った様子で、顔が紅潮してきたようにも見えた二人だったが、せっかくフリガナをふってやったのにと、少しイライラしながら、

「遠慮なんかしないで、早く読んでみろよ」と語気を強めて言った。

随分前のことなのに、その後のことは、今でも鮮明に覚えている。小柄な二人が体を更に小さくして、互いの体をすり寄せ合いながら目配せをしていた。そのうち、ようやく一人がボソボソと言った。

「俺たち、カタカナはだめだ」

私は、一瞬、何か固いもので頭を殴られたような気がした。英語の「フリガナ」はカタカナでふるものだと勝手に思い込んでいたこと、更には、担任から「カタカナやかけ算九九が十分できない生徒もいる」ということを聞いていたのに、十分な実態把握もしないで、一人前の教師気取りでいたことがとても恥ずかしく、あわてて二人の手から教科書をもぎ取り、

「ごめんよ。ホントにごめんよ」と謝りながら「フリガナ」をふった。

今でも英語の「フリガナ」を見ると、教師や大人の都合による上から目線で子どもを見ているのではないか、思い込みで生徒に接していないだろうかと不安になる。

『自分が源泉』という意識をもち、日々進化する教師

この4月、木の温もりと香りに満ちた木造平屋建ての新校舎において平成25年度のスタートを切りました。本校が新しい校舎になるのは、およそ45年ぶりのことです。

そこで、これを機に学校教育目標を『美しい心』『高い知性』『強い身体』を磨く生徒』に改めるとともに、こんな教師を目指そうと、第1回の職員会議で示したのが『自分が源泉』という意識をもち、日々進化する教師』でした。

考えの拠り所とした鈴木博氏の『自分が源泉-ビジネスリーダーの生き方が変わる-』(創元社)によれば、「自分が源泉」とは、『事実を事実として認め、その結果のすべては自分が創ったという立場をとり、自分の創った結果ならば自分で創り変えることができると考えて具体的な行動を起こそうとする考え』とあり、次のような例が紹介されていました。

「お口に合いませんでしたでしょうか？」

私たちが残したのを見た瞬間、目を見開いてそのフロアスタッフが言いました。東南アジア系の内装もおしゃれで、フロアのスタッフも礼儀正しく、感じのいい店でした。料理も決してまずいわけではありませんでした。ただ、私たちがおいしそうメニューにつられてしまい、つい品数を頼みすぎて料理を残してしまったのです。

「いや、おいしかったですよ。ちょっと量を多く頼みすぎたみたいで。気にしないでください」

頼みすぎたこちらの問題だと、自分たちは納得していたのです。

「そうですか。失礼しました。ご注文をお聞きするときの配慮が足りませんでした。申し訳ありませんでした」

そのフロアスタッフはすまなそうに頭を下げました。私は驚きました。その言葉には、「自分が源泉」で、お客様に無駄をさせてしまったという責任と潔さがありました。その「潔さ」に私は感動を覚えました。

「あなたのお客への対応は素晴らしいね」

彼の目を見て私はそう伝えました。

「いえ、そう言っただけだと……。こちらこそありがとうございました」

照れながら、そうして嬉しそうに彼はまた深く頭を下げました。

また、最近読んだ高木義之氏の『ありがとう』(『地球村』出版)という小冊子の中に、『うちの家はみんなが悪い』という作文が載っていました。家族全員が「自分が源泉」という意識をもっていると、家庭がこんなにも明るく温かで、居心地のよい場所となるということを紹介してもらいましたので、紹介します。

きょう私が学校から帰ると、お母さんが

「お兄ちゃんの机を拭いていて金魚鉢を落として割ってしまった。もっと気をつければよかったのに、お母さんが悪かった」

と言っていました。

するとお兄ちゃんは

「僕が端っこに置いておいたから、僕が悪かった」

って、言いました。

でも私は思いました。きのうお兄ちゃんが端っこに置いたとき私は「危ないな」って思ったのにそれを言わなかったから、私が悪かったと言いました。

夜、帰ってきてそれを聞いたお父さんは

「いや、お父さんが金魚鉢を買うとき、丸いほうでなく四角いほうにすればよかったなあ。お父さんが悪かった」

と言いました。そしてみんなが笑いました。

うちはいつもこうなんです。

うちの家はいつもみんなが悪いのです。

校長のつぶやき

沼田市立沼田中学校 「校長室より」

平成25年12月5日(木) 第5号

良質な情報のインプットを！

「学ぶ」という言葉には、「まな・ぶ」と「まね・ぶ」の二つの読み方があるということを知りました。「まね・ぶ」は、「まな・ぶ」よりも学問をする意味が薄く、模倣する意味で用いられることが多かったようですが、「真似る」が広く用いられるようになったために「まな・ぶ」の雅言（特に、平安時代に和歌などに用いられた洗練された言葉で、優雅で正しい言葉遣い）として扱われるようになったという説もあるようです。

末娘が幼稚園に通い出した頃、薄くらい部屋の隅で、絵本を手にしながらか何かブツブツと言っている姿をたまたま目撃しました。邪魔をしないようにそっと近づいてみると、絵本の表紙が末娘の体の方に向いているのが分かりました。私に気付いた娘は、照れ笑いをしながら直ぐにその動作を止めてしまいましたが、幼稚園の先生が絵本を読み聞かせてくれたことを思いだし、その真似をしていたようでした。

「刷り込み」の研究者でノーベル医学生理学賞を受賞したコンラート・ローレンツ博士は

人間というものは、第一に自分の好きな人、第二に尊敬を抱いている人からのみ、伝統を受け継ぐようプログラミングされている。(『生命は科学なり』より)

と言っています。末娘にとって、幼稚園の先生は「好きな人」であり、「憧れの対象」であったに違いありません。

私自身、教員になりたての頃、授業中の子どもへの指示や何気ない語りかけが、自分の恩師の言葉遣いにそっくりなことに気づいてハッとするとともに、妙な安心感がこみ上げてきたことを今でも覚えています。おそらく教壇に立つ位置や板書の仕方、教室内の歩き方までもが、子どものころに教えていただいた先生方の「真似」であったのではないかと思います。

また、私たちは、「憧れの対象」からは無意識のうちに色々なものをインプットしてしまうようです。以下は、私の保育園の頃の経験です。『幼稚園の教育』別冊『幼稚園実践』に掲載した一節

私が通っていた保育園では、毎月、「お誕生会」という行事がありました。内容は覚えていませんが、園児が係を分担し、その月に誕生日を迎える園児を祝う会だったと思います。ある月の「お誕生会」で私が「開会の言葉」を述べる係になりました。みんなの前で「これから、お誕生会をはじめます」と言うだけなのですが、生まれて初めてのことで、幼いなりに緊張した記憶があります。自分の役目を果たし、ホッと教室の隅まで戻ってくる私を、ニコニコしながら先生が迎えてくれるはずでした。

ところが、先生は「よくできたね」と言うかわりに、「今日はお誕生会なのよね」と困った顔をしていました。さらに、「さっき何て言ったか覚えている？」と聞いてきたのです。それでもポカンとしている私でしたが、次の言葉でようやく事の深刻さを理解しました。

「ノブアキちゃんはね、『これから、お昼の放送を、はじめます』って言ったのよ」

当時は、天気さえよければ、昼食後は、隣接した小学校の校庭に出て、「お昼の放送」を聞きながら遊んでいました。少し大人びた放送に憧れていたのかもしれませんが、『これから』+『お昼の放送を』+『はじめます』という言葉の組合せが、無意識のうちに頭の中にインプットされていたようです。

人生初めての経験で挫折したことがトラウマのように心に残り、今でも人前で話をするときには、意味不明な言葉をアウトプットしてしまうのではないかと不安になります。また、息子が3歳の頃、村の広域放送で、「こちらは」という言葉が流れてくると、「ぼうさい かわば です」と言っている姿に、自分自身を見るようで、言葉を覚えることを単純に喜べない思いをしたことがありました。

本格実施2年目を迎えた学習指導要領では、「言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実すること」と明記されています。子どもにとって、校内の掲示物や校内放送等も重要な言語環境の一つであり、意識的・無意識的に子どもにインプットされる『隠れた教育課程』であるということ、改めて認識し、「できるだけ良質な情報をインプットしてやりたい」という思いを強くしているところです。

「確たる教育観」と「地道な指導」

昨年の夏は、いつもと違う熱い夏でした。阪神甲子園球場で、最後まで諦めない「粘り強さ」と「攻撃的な守備」で快進撃を続けた前橋育英高校が、本県代表としては14年ぶり、初出場校としては22年ぶりとなる全国優勝を果たし、全国3,957校の頂点に立ったからです。正直なところ、いつの間にか決勝に残っていたという感はなくありませんが、若者の躍動する姿を目にし、うだるような暑さもあまり苦にならなかったことを覚えています。

中でも、印象に残ったのは、宮崎県代表の延岡学園との決勝戦の9回表一死三塁、タイムリーが出れば前橋育英高校に1点加わり、試合の大勢がほぼ決まるという場面でした。5番バッター小川捕手が2-2からの6球目に打ったファールチップが、延岡学園の柳瀬捕手の右手を直撃し、柳瀬捕手はその場にうずくまってしまいます。そのとき、コールドスプレーを持って直ぐに駆けつけたのが、一塁コーチである前橋育英高校の富田選手でした。また、打者の小川捕手は、柳瀬捕手のグラブとマスクを手に持って回復を待っていました。

一方、その裏の延岡学園の攻撃、1死一、二塁の場面。今度は8番バッターとして打席に立った柳瀬捕手がキャッチャーフライを打ち上げ、小川捕手がマスクを外して三塁側の延岡学園ベンチの手前まで追いかけてスライディングキャッチをしました。テレビを覗いていた限りではわからなかったのですが、残りアウト一つとなった状況で、小川捕手のキャッチャーマスクを拾って手渡したのが、延岡学園の次の打者で、結果的には最後の打者となる奈須投手だったと、Number Web「甲子園の風」(平成25年8月23日配信、本校の林教諭からの情報提供)が報じていました。

試合後、選手にインタビューしたところ、両チーム共に「そうした行為は当たり前」と答えていたようですが、熱中症のために選手が交代せざるを得ないような酷暑の中、しかも1点を争う緊迫した決勝戦にあって、敵味方なく相手を気遣う行動を当たり前にとれる両校の選手の磨き上げられた「人間性」が、真の強さをもたらしたのだと思います。その後、「グラブぐんま」(2013、10月号)の「かお」に「監督就任後、チャンスはあったもののなかなか夏の甲子園出場が果たせず、周囲の評価を気にしたこともあった」と、育英句稿硬式野球部を率いる荒井監督のインタビュー記事が載っていましたが、若者たちの色々な未熟さや学ぶ意欲の低下、取り巻く環境の劣悪化等の課題が指摘される中、重要なのは、揺るぎのない「確たる教育観」であり、「地道な指導」であるということに改めて教えていただいたように思いました。

両校の選手が示してくれた「どのような状況下に置かれても、冷静に、かつ周りの人々を思いやりながら最善の道を選択し、心豊かに生きていこうとする姿勢」を手本としながら学校経営を進めてきたと、気持ちを新たにした暑くて熱い夏でした。